

# 陳玉成

土井弘美

はじめに

- 一 陳玉成像
- 二 陳玉成と太平天国
- 三 陳玉成の死とその意味について
- 四 陳玉成評価

はじめに

ここに記そうとしているのは、陳玉成という一人の武将のありのままの姿である。彼は太平天国の内訌後、李秀成とともに太平天国を支える柱となった。が、李秀成がリンデーをはじめとして各方面から高い評価を受けはなばなし舞台にのぼっている一方で、陳玉成はその影に隠れた地味な存在である。それは何故なのか。以下の文章は人間陳玉成、そして彼の正しい評価と位置づけを試みたものである。

陳玉成(土井)

## 一 陳玉成像

陳玉成は一八三七年広西省藤縣新旺村に生まれた。初名を不成という。孤児であり、叔父陳承鎔に育てられた。家は雇農で貧しく、十四歳の時叔父に従い金田の团营に投じ、持ち前の勇敢さによって次々と位をあげていった。内訌、翼王石達開の出走の後、成天子に封じられ、前軍主将として軍事の重責を担った。五八年、李秀成と江北大营を撃ち、安徽廬州、三河鎮で李統寶の湘軍を撲滅し、揚子江上流地域を確保、これにより翌年英王に封じられた。六十年、江南大营を破って天京を救い、常州、蘇州に進んだ。安慶の包囲を解きかつ天京を安んずるため、勢いに乗って第二次西征が企てられた。李秀成と陳玉成が揚子江の兩岸をともに軍をすすめ、武漢を攻撃する計画であった。が李秀成が義民吸収に手間取ったため、また陳玉成が安慶

の急を聞きもどつた為、両者の息が合わず、失敗に終わった。それにより安慶は激戦の末陥落、玉成は廬州に兵を連れ退いた。陳得才らを河南、陝西に派遣し汴京を討つ計画を立てたが失敗し、苗沛霖の謀略により清軍に捕えられ延津で処刑された。時に若冠二十六歳であつた。

陳玉成はこのような経歴の持ち主であり、これからも伺えるように、勇敢な武將であつた。では人々は陳玉成についてどのように見ていたであらうか。なるべく陳玉成像を具体的になほつきりしたものにさせるために、彼を数多くの観点から眺めてみたいと思う。

清側の史料のうち、戦闘について記したものは時おり陳玉成の名が見える。「賊情纂奪」ではその巻二「劇賊性名上」で彼について次のように述べている。玉成十九歳、西征軍に従つて湖北を攻撃した時の記載である。「五月、武昌県より梁子湖に入り、迂回して省城の東面に至つた。六月二日、(陳玉成は)五百の賊を伴ひ、繩にすがつて城壁を登つた。官兵は散りぢりになり、ついに湖北省は陥ちたのである。……十月官兵は蕪州を回復し、つづいて田家鎮を破つた。玉成は敗れて広濟、黃梅、一帶にひそんだ。九江に至り、林啓容を頼み、彼と協同して守つた。玉成は命を捨てて苦戦し、城を攻め陣を陥とし、すばやく先がけて(城壁を)登る。賊中の最も恨むべきものである。」

人を行動に駆り出し、優秀な外国製の武器によつていたずらに味方の犠牲を大きくする結果を生んだ。したがつて陳玉成の果たした役割の方が、秀成のそれより大きかつたと云つても過言ではない。

李秀成は陳玉成に対し、多少なりともライバル意識を持つていたようであり、また、自らの作戦を重んじる余り、彼の作戦に協力しようとはしなかつた。第二次西征の失敗、またそれに続く安慶、廬州の失陥と陳玉成の死の二因はこのような秀成の態度によるのである。しかし、彼も玉成の勇敢さを認めるのにやぶさかではない。自述の中で、彼は鎮江攻略の際の事を次のように回想している。一八五六年二月、冬官丞相陳玉成は燕王秦日綱に従ひ鎮江に赴いた。この年太平軍は北伐軍の潰滅など敗戦が続ぎ危機にひんしてゐた。それがこの戦の勝利により天京が安んじられ、危機から脱する事ができた。そしてこの戦を勝利に導いた者こそ陳玉成なのである。

「そこで各丞相とはかつて、丞相陳玉成を小舟に乗せ、川から鎮江に下らせた。水面はみな清の砲船で隙間なく進路をはばんでいたが、しかし陳玉成は死を決して突破し、鎮江に下つた。」

これらの清側、太平天国側の史料から、陳玉成が勇敢な死を恐れない武人であつた事、太平天国の軍事的重鎮であ

全く、陳玉成の死を怖れぬ勇敢な行動は、清軍の恐怖の的であつた。彼を捉え処刑した後、曾國藩は上奏してこう言つてゐる。

「漢唐以来、この賊のようにたけだけしい者はなかつた。同じ勇敢な行動はむろん、太平天国側から見れば頼もしい限りであつた。洪仁玕はその自述の中で、陳玉成をしみじみと思ひ起している。」

「英王が死ななかつたら、天京が包囲される状況も大いに異なつていたに違いない。なぜならば、もし彼が江北に活動していれば、われらに常に交通の利を得させ、仙女廟とその付近の各地と絶えず接触する事ができるからである。英王が一たび去るや、軍勢と軍威は同時に失墜し、すべて瓦解する事になり、このため清軍は容易に戦勝を得た。」この言葉から英王は太平天国に於て非常に重要な役割をはたしてゐた事がわかる。

後期太平天国の軍事的中心人物は李秀成と陳玉成の二人であつた。陳玉成は湖北東部より安徽西部一帯で活躍し、李秀成は江蘇、浙江を主な舞台としていた。しかし、本軍に力を入れなければならぬのはむしろ陳玉成ひとりであつた。西部戦線であつた。従來の清軍とは一味違ひ曾國藩率いる湘軍がじりじりと太平軍を追いつめていたのである。一方東部戦線はそれまで積極的行動に出なかつた外国

つた事は明らかである。

常勝軍の軍艦「ファイヤフライ」号を手みやげに太平天国に投じたり「ドレー」は、また別の陳玉成の一面について語つてゐる。

「彼等(大通付近の村の住民)はまた太平天国の首領英王(陳玉成)の事をたいへん好意をもつて話した。英王は支払いをせずには何一つ民衆から取る事を許さなかつた。陳玉成はこの規律の厳しさのため、かなりの人望を得てゐた。人々は言う。」

「威名は天地をゆるがし、天朝第一の名士です。」また「常々三つの良い所がある。第一に讀書人を受する事、第二に百姓を受する事、第三に色を好まない事だ。はもはやその人望は、秀成の上をゆく観さである。」

ここで、現代中国に於ける陳玉成評価について少し触れたい。現代中国では彼に対しまるで讃辞の雨を浴びせかける如くである。羅爾綱は、彼と秀成を、

「二人の後期太平天国を支えた大英雄」とし彼を

「英王は一人の大変な少年英雄であつた」と讃えてゐる。一九七二年版の上海人民出版社による「陳玉成」に至つては、最大限の讃辞を惜しまない。

彼等は言う。

「彼は困難と危険を恐れず、毅然として立ち意志も固く、

はなはだ困難な危険にひんした局面を支え、東にゆき西を討ち、勇敢に敵を殺し、偉大な業績を打ち立てた。

むろんこれらの言葉は、陳玉成のみに向けられたものではない。中国に於てはことに、太平天国についての評価は、英国をはじめとする帝国主義及び清朝封建主義に敢然と立ち向った農民革命としてはなはだ高いのであり、その太平天国のため、愚忠を尽した陳玉成の評価が高いのも至極当然である。

さて、以上の様な様々な角度からの陳玉成評価を読んでくると、これらの一見断片的な文が、期せずして同一の方向を指し示しているという事を発見する。それは陳玉成がはなはだ勇敢な年青い武人であり、かつ潔癖で敵しい人間であったという事である。そして敵味方をあげて彼に脱帽しているのである。彼の生存中から死後現在に至るまで、彼は軽蔑されたり批判を浴びせられたりした事がない。この不思議な魅力はどこから来るのであろうか。単に彼に死を恐れない勇敢さがあるからのみによるものであろうか。それのみとは思われない。以下の節でそれらを順次明らかにしてゆきたい。

註

(1) 『賊情彙編』卷二「劇賊姓名上」『太平天国資料叢刊』二六六頁

- (2) 『被擄紀略』刀口餘生著『太平天国資料集』二二二頁
- (3) 『洪仁玕自述』『太平天国資料叢刊』二八五三頁
- (4) 『李秀成自述』『太平天国資料叢刊』二八〇八頁
- (5) 『第五に重用したものが英王の陳玉成、六番目に重要したのがこの秀成であった。』などにこの片鱗が見える。
- (6) 第二次西征は南路を通った秀成が義民吸取に手間取ったため失敗、また秀成は英平で安慶危機の知らせを受け取っていたが赴こうとはしなかった。
- (7) 『李秀成自述』『太平天国資料叢刊』二七九七頁
- (8) リンドレー『太平天国』一六六頁
- (9) 『被擄紀略』二〇二頁
- (10) 同 二〇六頁
- (11) 『英王陳玉成自述跋』『太平天国史料考釈集』二〇六頁
- (12) 同 二〇六頁

二 陳玉成と太平天国

陳玉成の特徴は彼と同時期に太平天国の首領であった李秀成と比較する事によって一層明らかになる。彼等は同県同村の出身であり、幼時からの友人であったが、太平天国に忠誠を尽したという事を除いては軍事的関心など多くの点で異なる面を持っている。

まず、『李秀成自述』を読んで目につくのは、秀成が再三にわたって天王を諫めたり、衝突したりしているという

事である。彼は述べる、

「私は元來一兵卒から出た者であるが、このように重大な任務について、国が様々に乱れ天王もいるべき所にいないのを見て、臣としての心力をつくして天王を諫めた。才能を見て人を用い、きまりを定めて人民を救済し、法令を厳しく守るように通達し、朝廷のすじみちをきちんと立て、……人民たちの地租を軽くし、もともとおり翼王を重く用い、安一福両王を用いないようにと、私はていねいにわが主に申し上げたのである。」

これは石達開出京後、秀成が朝廷の混乱を見かねて進言したものである。天王は怒って彼の位を取り上げたが、秀成は再度上奏文を作って天王を諫め、認められて復職した。

彼はその後、一八五八年一月から三月まで三カ月におたって天京にて政權を握った。善政を行ない、これが太平天国が内訌より立ち直るきっかけであったと言われる。

再三の秀成の奏上の内容はいちいちもつともであり、彼の善政はその政治的手腕を示しているようである。しかし第二次西征の時、彼の取った行動は明らかにゆきすぎであったと言わねばならない。

(秀成は武漢攻撃に陳玉成とともに行くよう天王に命じられたが蘇州の義民を吸収するため)「北方掃蕩はしたくない

いと申し上げたところ、わが主は非常に怒り、堪えきれぬ程の責めをうけた。」にもかかわらず、

「わが主の命に逆らって、私を信じてくれる友の情のために軍を出して江西、湖北に行った。」のであった。

これは李秀成がもはや天王の判断力より自らの判断力を頼むようになった事を明らかに示している。彼は確かに有能な軍師であった。しかし、石達開の例が示すように、どんなにすぐれた「個」でも「全体」から離脱してしまえばその持つ力は十分には發揮し得ないのであり、ここで彼が全体の歯車として噛み合わない勝手な行動をしてしまった事が、やがて太平天国全体を崩壊へと導いたのである。

ともかく、彼が政治的関心も強く、天王に対し批判的であり(天王は逸楽にふけていたため当然だが)政治的手腕もあつた事は理解するに難くない。

では、陳玉成はどうであろうか。面白い事に全く秀成とは逆なのである。玉成は一度も直接に天王を諫めなかつた。彼が天京の政治に口をはさんだのは、洪仁玕の天京到着の際彼に手紙を送り、

「章程をさだめ時弊を救い、賞罰の法を厳しくせよ。」と述べた、ただ一度だけである。洪仁玕は天王にこれを上奏、やがて印刷して頒布した。この建議は時機を得た的確なものであったのである。これにより、陳玉成には政治的

判断力がないとはとうてい思えないのであるが、何故か彼は諸々と天王の命に従っており、一度として反発した事はない。

安慶失陥後、天王は彼と洪仁玕に対しその責任を追求し、彼等を免官した。そして彼の部下を続々と王に封じた。賞の不平等ここに極まった訳であるが、陳玉成は頼文光にあてて次のように書き送っている。

「すでに聖恩をこうむっている以上、賞もあれば罰もあるのは当然です。この点を考えれば今度の処置も幸いなるかなです。」

この理由は一体何なのであろうか。玉成は何ゆえかくも天王に対し素直なのであろうか。天王の逸業が、狂信が見えなかったものであろうか。その政治的判断力は秀成よりもはるかに落ちるものであったのだろうか。断じてそうではない。陳玉成が天王にそのまま従い、逆らおうとしなかったのには理由が幾つか考えられるのである。

その一つは、陳玉成は十四歳から太平天国に投じ、戦いの中で太平天国の教義を学び、育った、という事である。太平天国の発行した数々の書物によれば、天王は天父エホバの子であり、イエスを兄とし、この世の邪悪を根絶するために遣わされた神の子なのである。

「王長兄次兄親耳親日共証福音書」によれば、

「天下万国の人民は朕（天王）の統治下におかれた。……朕こそは天父皇帝の真の命を受けた子である。」<sup>(6)</sup>のであり、かつ、

「妖と戦った時、爺（天父）が哥（天兄）のうしろにおられ、天兄が朕の後ろにおられた。我々三人——爺とその二人の子は自ら天将天兵を統率して妖魔を天上から追放した」のであった。天王は神の化身であると教えられており、完全にそれを信ずるならば、天王の命に逆らう事はすなわち神の命に逆らう事であったのである。太平天国の教義が体の一部となっていたのであろう陳玉成にとって、それは出来なかつたに違いない。天王が放逸な生活を墮落していった事が見えない訳ではなかつたが、それは一つのやはり運命であるとしてこれを受け止めたのである。

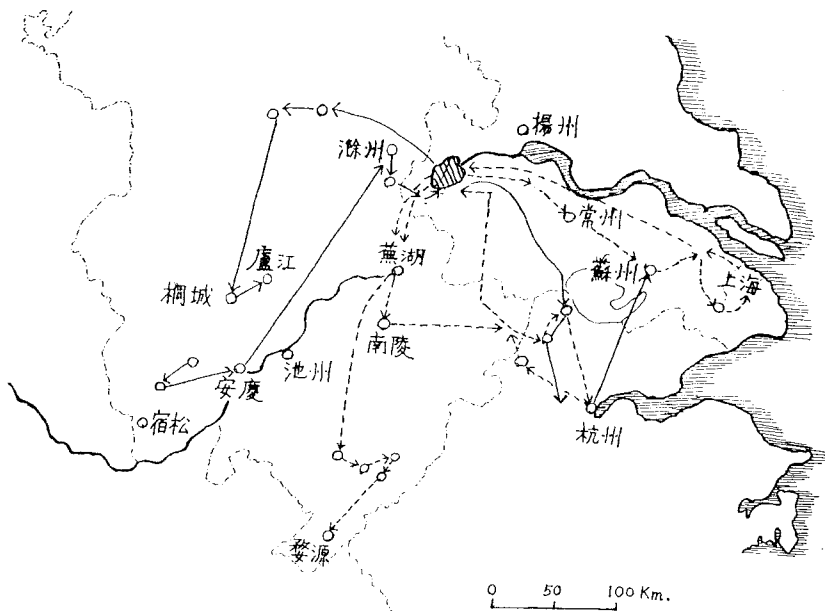
もう一つは彼は天王を批判するには、余りにも太平天国に没入してしまっていた、という事である。具体的に言うならば、彼はやはり全体に傾く「統率者」としての天王を尊んでいたのである。つまり、太平天国は天王なくしてはもはや太平天国として存続し得ないという事を熟知していたのである。天王を無視し、太平天国を無視して自ら独立した行動を取るならば、それはすでに自らの為にも、むしろ太平天国全体の為にもならないのである。たとえ、自分が不利益になつたとしてもそれが全体の利につながるなら

### 太平天国行軍路 (附図説明は16頁)

—→ 陳玉成軍行路

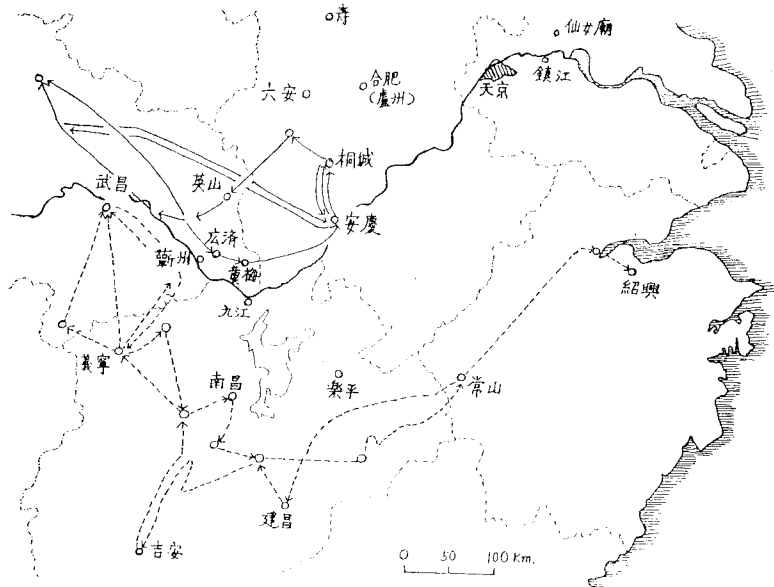
----- 李秀成軍行路

〔I〕 1860年



陳玉成(王井)

〔II〕 1861年



ばやはり甘受すべきなのである。太平天国の一員である以上、ことに危機的局面に臨んでは、統率者天王を無視し、これに逆らう事は、彼には出来なかつたのである。

陳玉成と李秀成の性格の違いは、彼等の捻軍の扱い方にも顯著にあらわれる。李秀成は言う。

「李昭寿（捻軍の頭目）は私の部下であり、私は彼を重く用い深く信頼せずにはいゝなかつた。」<sup>(8)</sup>後に李昭寿は李秀成を裏切り滁州を清に渡し投降したが、その時も、

「私は責めた事はなく、天京にいた彼の妻をば、わが天王をいつわりひそかに送りどけた。」<sup>(9)</sup>のであつた。李秀成は捻軍とともに行動する事が多い。しかしこの捻軍というのは、なかなかの曲者であつた。軍律は乱れておりアヘンの吸飲、略奪をほしのままにし、身の保全のため都合のいい方へすぐに寝返つた。そして李秀成と陳玉成は捻軍に対する対応の仕方が全く違ふ。

以下の文は、一八五九年、前々から陳玉成と仲の悪かつた章志俊が安徽省池州で清に降つた時の事である。

「賊帥章志俊の軍が裏切り、はかり事をめぐらして逃げたのを聞き、陳玉成は楚より会に來た。兆寿（李世忠）が行つて拜謁した。玉成は彼の滞在を怒り、軍がアヘンを吸い、略奪品が多いので彼を斬らうとした。兆寿は膝をついて謝り、久しくしてようやくおさまつた。（兆寿は）出て

左脚を斬られ、右脚を民家の門に踏み入れた者は右脚を斬られたのである。」<sup>(10)</sup>

陳玉成が大きな人望を得ていたのは、単に彼が勇敢だからのみならず、この様な太平天国本来の規律を厳しく守り、決して民衆を傷つけなかつた、という事にもあるのである。

以上、陳玉成が天王を諫めなかつた事、また捻軍と多く結ばなかつた事について述べた。これらの事を総合的に見てみると、そこに一つの事実が浮かび上つてくるのである。言葉を変えれば、陳玉成の取つた行動はすべて太平天国本来の思想や規律に照らし合わせてみれば納得出来るものばかりであり、逆に太平天国の域を一步たりとも出てはいないのである。これが陳玉成の性格の大きな部分を形づくつてゐる。陳玉成の性格は太平天国の本来の思想、精神が最も激しく、最も純粹な形でゆがめられずあらわれたものであり、彼の人氣の秘密もそこにある。人々は玉成に讃辞をささげる事より、太平天国精神そのものを讃えていたのである。彼は若くして死んだ勇敢な青年武將であつた。が、それだけで彼の生存中から死後現在に至るまでかくも長きに渡つて英雄の威名をほしのままに出来るのであらうか。彼の精神が、太平天国精神そのものであつたからこそ、このような結果になつたのである。そして、太平天

から怒り、衆を整え攻撃しようとしたが、部下が恐れて敵とならなかつたので中止せざるをえなかつた。玉成はまたこれを聞き、とうとう憎みあうようになった。<sup>(10)</sup>玉成はその軍律のだらしなさを憎んだのである。それは太平軍とは全く相入れないものであつた。玉成の活躍した安徽西部から湖北東部にかけては捻軍の本拠地であり、被さえその気ならほ思うさま捻軍と結ぶ事が出来た。そうしなかつたのは彼の厳しき、潔癖さによるものである。

陳玉成の軍律は厳しかつた。第二次西征の時に彼が武漢を攻撃しないよう牽制に行つた英國書記官パークスは次のように述べてゐる。

「三番目の告示の上には、二人の反徒の首がかかつており、この二人は軍の食糧を徴取する際、人々の衣服を盗んだために首を切られたという事が示されてゐた。おろん、この厳しきは太平天国全体に言える事である。『太平条規』では行軍の時の規律を、次のように規定してゐる。

「男女を問はず、持兵が村に入って飯を炊く事、食物を取る事、民家を破壊する事、財物を掠奪する事、及び薬屋や州、府、県の役所を搜索し掠奪する事を禁止する。」<sup>(11)</sup>また李秀成は軍規の厳しきについてこう語つてゐる。

「いかなる持兵でも、命令なく民家に立ち入つた者は斬罪に処せられた。左脚を民家の門に踏み入れた者はすぐさま

国が不滅ならば、陳玉成もまた不滅なのである。

註

- (1) 「李秀成自述」『太平天国資料叢刊』二七九五頁〜七九六頁
- (2) 同 八一三頁
- (3) 同 八一三頁
- (4) 「洪仁玕立法制論」『太平天国史料』一五三頁
- (5) 「陳玉成致賴文光等書」『太平天国資料叢刊』二七四四頁
- (6) 「王長次兄親耳共証福音書」『太平天国資料叢刊』二五〇頁
- (7) 同 五二一頁
- (8) 「李秀成自述」『太平天国資料叢刊』二八〇三頁
- (9) 同 八〇二頁
- (10) 「兩淮戰亂記」『中國近代史料叢刊』三「捻軍」二九六頁
- (11) S. Lane Pool, Sir Harry Parkes in China, p. 369.
- (12) 「太平条規」のうち行軍規程『太平天国資料叢刊』一五〇六頁
- (13) 「李秀成自述」『太平天国資料叢刊』二 七九二頁

### 三 陳玉成の死とその意味について

陳玉成を語る時、やはりその死に触れずに済ます事は出来ない。彼の死は陳玉成の本領を遺憾なく發揮してゐる。

また数少ない陳玉成の史料のうち、「英王陳玉成伝」の類のもの、殆どすべてが彼の死に臨んだ時の描写にその一面をさしているのである。現代中国に於ても彼の死には最高の讃辞を捧げている。陳玉成の魅力の秘密の一端がこの「死」にある事は容易に推察できる。

さて、ではここで陳玉成がどのような経過をたどって死に至ったか、そのあらましを追つてみたいと思ふ。

一八六年九月、安慶は陳玉成をはじめ洪仁玕、林紹璋らの必死の努力にはかかわらず激戦の末、曾國藩の手に落ちた。安慶の落城は勢いに乗つた敵が長江にそつて天京まで攻めのぼつてくる事を意味した。李秀成は江西省南昌付近におり、何故か救援には来なかつた。ために局面を開く重責はひとえに陳玉成の肩にかかつてきた。天王は安慶失陥の責により、陳玉成、洪仁玕を免職にし、かえつて玉成の勢力を封じるため彼の部下を次々と王に封じた。悪名高い諸王乱立がはじまつたのである。

玉成は安徽六安に赴こうとした。が、將兵は彼の命をきかず廬州に下り、やむなく玉成もまたしりぞいて廬州を守るに至つた。桐城、貴池、宿松、英山など太平天国の拠点が次々と失われ、軍内の動搖はおおむねなかつた。軍事會議がひらかれ、そこで安慶回復について二つの意見が提出された。一つは陳玉成を代表とする意見で、陳得才、頼

文光らを河南・陝西に派遣し、西北に進軍させ、自らは廬州を守るといふものであり、もう一つは頼文光によるもので、張洛行、苗沛霖を連れて天京を固め、奇襲兵によつて蕪州、襄陽の地をとろうといふものであつた。軍が安慶に於けるかつてない大敗によつて非常に消耗しているこの時、陳玉成が主張する様に軍を二つに分割する事は適切ではなかつた。しかし陳玉成は自らの意見を断固主張し、その結果廬州府に独り囲まれる事となつた。援軍のあては皆無であつた。彼はたびたび陳得才らに手紙を送つたがそのたびに清軍に押えられ、目的を達する事が出来なかつたのである。そして一八六二年五月、廬州は敵軍首領多隆阿により攻略された。玉成は必死になつて崩れてゆく味方の軍を支えようとし、城の堀の浮橋を切つて兵を留め戦わせようとしたが、その敗北はどうする事もできなかつた。陳玉成、陳仕榮は兵を率いて北に走り、苗沛霖の謀略にかつたのである。

これより以前、苗沛霖は玉成に手紙を送つた。その内容は英王をおだて、かつ腹中をよみ、寿州に来ればともに津京を攻撃しよう、というものであつた。玉成はこれについて會議を開いた。彼の部下の者は、一人残らず、苗沛霖は信用出来ないから行くべきではないと進言した。事実すでに苗沛霖は勝保の陣に降つていたのである。玉成はしかし

行くつもりであつた。彼は部下に向かつて言つた。「俺は兵を用いて以来戦えば必ず勝ち、攻めれば必ず取つた。虚心に善言は聞かぬが、今度のお前の言は大いに俺の意に反している。」

寿州に走つた陳玉成を、苗沛霖はおいの苗景開をやつて迎えさせた。玉成は城についた後、酒食によりもてなされたが、苗沛霖はまだ会おうとはしなかつた。やがて苗景開が清の官位を表わす玉や孔雀の羽をつけて出て来て英王に清朝に降伏するよう、ひざまづいて言つた。玉成は彼を指して罵つて言つた。

「お前の叔父は全く頼むべくもない小人だ。垣の上の一本の草だ。風が吹けば二面にたおれる。竜が勝てば竜を助け、虎が勝てば虎を助ける。將來賊名すらも留めはしないだろう。私は殺されるべきであつて辱かしめられるべきではない。勢がこのようになってしまつたからには、お前達はどうにでもするがよい。大臣や六部、各丞相は皆手を動かそうとした。が、彼はこう言つた。『それには及ばない。』」

このようにして玉成は捕えられた。彼が勝保の陣に送られた時のもようを、「陳玉成受擒記」では次のように述べている。

「玉成はすでに苗沛霖のとらえる所となり、解かれて勝保

の營に至つた。玉成が入ると、勝保は高座から見下して言つた。「成天子、どうして跪つかないのか」玉成は言つた。「私は英王で成天子ではない。跪つくものか。お前はもとは私の敗將ではないか。何故私に向つてそのような態度を取るのだ。」勝保は、「それなら何故私につかまつたのか」と言つた。玉成が言つた。「私は自分から網に飛び込んだのだ。どうしてお前の手柄なものか。私は今日死ぬが、苗賊も明日亡ぶのみである。合肥の官亭でお前の騎兵二万が私と戦つた時、一人でも生き残つた者があつたか？」勝保は黙り込んでしまい、酒食を与えて投降を勧めた。玉成は「大丈夫は死ぬ時は死ぬのだ。どうして無駄口をたたく事があるらう」と言つて殺された。」

陳玉成が捕えられたと知り、張洛行は衆をあわせ河口に至り、無事事を企てた。この頃頼文光等も廬州が囲まれた知らせをようやく受け取り、日夜兵を急がせていた。これらの知らせを聞いた清側は、北京へ護送する途中、延津で玉成を死刑にしたのである。

この陳玉成が死に臨んだ時の記録に接し、まず感ずるのはあまりにも美しく、見事であるという事である。そこには一片の言葉をもさしはさむ余地はない。たとえどんな言葉で表現しようと、それは彼が敵敵たる死というものの前で示した勇気の美しさの前では、まるでちりのように、色あ

せた、取るに足りないものでしかないのである。

清側の史料や、清代に書かれた記録の中の「陳玉成伝」の殆どが、この死に臨んだ時示された勇氣に感嘆しても、無理もない事なのである。これは誰の胸にも感動を呼び起す一つの事柄である。しかし彼等はその他の事については余り触れていない。彼等が讃えたのは「陳玉成の死」だけであつた。乍らん彼の持つ性格を如実に表現していると言つていい。しかし彼は一人の人間なのであり、「死」は確かに象徴的な出来事ではあるが、それだけですべてでは決してないのである。

現代中国は、もともと彼に讃辭を惜しまないが、死に關しては文字通り絶讃している。彼等は言う。

「陳玉成は戦場であつて突撃して敵陣を陥とし、勇敢に突進する英雄であり、死刑執行場にあつて、悲憤慷慨し、身命を捧げた好漢であつた。彼は捕えられた後、革命者の英雄らしさを保持しつづけた。……眞の英雄は危機に臨んでどうして恐れる事があろうか。」

まさに、現代中国の陳玉成礼讃の原点はここにあるのである。それは、陳玉成の示した勇氣とともに、彼が太平天国精神を保持しつづけた、という事である。むしろ後者を高く買つてゐるのである。現代中国は確かに陳玉成を讃える。しかし、彼等は陳玉成を通して太平天国の精神を、陳

玉成のの太平天国の中で果した一つの衛士としての役割をたたえているのであり、それは決して陳玉成自体に向けられたものではないのである。だからこそ次の様な一節にゆきあたるのである。

「彼の偉大な英雄の形姿は、ながく人民の心の中に銘記せられ、彼の堅固な革命精神は、人々の前進をずっと激励する事になるであらう！」

彼の死は確かに清代史料に語られるように美しい勇敢さの提示であり、現代中国が示すように一人の武將が太平天国革命精神を死に至る迄保持し続けた悲劇的な出来事であつた。陳玉成の死は、だが余りにも象徴的である。それは太平天国の純粹な精神の一八六二年のこの時に於ける敗北を意味する。彼は余りにも純粹すぎた。そしてそれにより滅びたのである。

これまで、陳玉成の魅力、その高い評價の理由について様々な角度から述べてきた。外面的には勇敢さであり、内面的には太平天国と一体化した彼の精神であつた。そしてその両者が、最も嚴肅な事実である「死」に臨んだ時にいかに発露されたのである。

しかし、その中にこそ、今迄誰も発見出来なかつた彼の眞の姿をかいま見る事が出来るのである。それは彼の性格があまりにも純粹で、あまりにもまっすぐであつたという

事なのだ。それが今迄述べたような外面的、内面的なあらわれ方をしたように思ふのである。そしてそれこそが何故かわからないがむやみと彼の潔さに喝采したくなる、すべての人間の心にひびいてくるものなのである。彼はその純粹さゆゑ滅びた。しかし同じくその純粹さによって人々に忘れ去られる事なく今日に至つたのである。

註

(1) 「陳玉成受擒記」『太平天国軼聞』卷一 四二頁

(2) 「陳玉成」上海人民出版社 五四頁

(3) 同 五五頁

#### 四 陳玉成評価

陳玉成は李秀成に比べて、目立たない存在となつてゐる。李秀成について書かれた研究書は多いが、陳玉成を正面から取り上げてゐる研究は殆どないと言つていい。これはどういふ事を意味するのであろうか。陳玉成は李秀成と同様か、それ以上の軍功があつたはずである。

結局、陳玉成について書かれた史料が少ない事にもよか、それよりも陳玉成が太平天国の中で目立つた行動をしていないために余り人の興味をひかないと考へた方が適切であらうかと思ふ。そのために陳玉成はこれまで華々しく脚光を浴びせられる事もなかつた。

確かに、彼は一見特徴のない、つまらない、ただ勇敢な

だけの武人に見える。これまで述べてきたように、彼は天王の命に唯々諾々として従い、自らを主張する事はなかつた。しかしそれが、決して彼を「つまらぬ人間」とするものでない事は、以上語つてきた通りである。が、もしここで彼を「個性がない」「特徴がない」と評する人がいるならば、それはつまり太平天国という目を通して彼を見てゐるからである。逆に、太平天国を暗闇に沈め、陳玉成にのふライトを浴びせてみるならば、我々はそこに、太平天国の精神を、いや、太平天国そのものを見出すであらう。そしてそれこそが陳玉成の偉大な個性なのである。

そしてここに、陳玉成の太平天国に於けるあり方こそ、すべての運動に於ける個人のあり方の原点だという事を信じるのである。新しい時代を目指して流れる大きな人々のエネルギーの中にあつては、彼等一人一人が何者でありどこから来たのかという事はもはや問題にはならないのである。どこへ行くか、その目的のみが問題なのであり、そこでは「個性」というものは不要なのである。最も重要な事は、誰もが一つの目的に向かつて自分の持つてゐる能力のある限り尽してそのエネルギーを強めるといふ事なのである。

陳玉成の持つてゐた能力は勇氣であつた。そして彼はそれを最大限に示し人々を奮い立たせたのである。陳玉成は

太平天国と一体化することによって彼自身の個のエネルギーを全体のそれに変えたのである。

彼は常に一人ではなかった。そこには同じ方向に数多くの仲間があった。彼等一人一人の力は非常に微力なものではない。しかしそれが太平天国という大きなエネルギーに結集された時、長江のような一つの巨大な流れとなり、堰を切つてあふれ、渦巻いた。それは時代の流れである。誰も止める事の出来ない近代への奔流である。

その中で、陳玉成の存在は、確かにわずかなものでしかなかった。だが彼は一つのシンボルであった。多くの人々があこがれ続け、そして手に入れる事が出来なかつた。「近代」への「自由」への、またそれらへ到達するまでの数々の目標への架け橋であった。彼はそれらを達成するための敵しさの勇気さの象徴であった。かくあるならば必ず目的を達せられるであろう人々に示すに十分な道標であった。それだからこそ人々はその勇気を、凛々しさを讃えた。そしてそれを後世へと伝えたのである。

太平天国という一つの大きな運動がもろくも潰れた時、陳玉成もまた犠牲となつた。しかしその瓦礫の中から新たなエネルギーが次々と生まれていった。中国の近代が、そして現代が、太平天国を一つの踏ん台として出来上つたものである限り、太平天国とともに歩み、ともに死した陳玉

成の名は、歴史の中にその輝きを失う事はないであろう。

参考資料

- 一 『太平天国』(四十李秀成の幕下において) リンドレイ著 増井経夫、今村与志雄共訳 平凡社東洋文庫 昭和三十九年
- 二 『太平天国』 李安世著 依田意家訳 新人物往来社 昭和四七年
- 三 『原典中国近代思想史』第一冊 西順藏編 岩波書店 一九七六年

参考史料

- 一 『中国近代史料叢刊Ⅱ』太平天国 I、VI 中国史学会主編 神州国光社
- 二 『太平天国史料』金毓黻、田餘慶等編輯 中華書局 一九五九年
- 三 『中国近代史料叢刊Ⅲ』捻軍 I 范文瀾、翦伯贊、葛崇岐等編 神州国光社 一九五三年
- 四 『太平天国史料考釈集』羅爾爾著 北京、三聯書店、一九五八年
- 五 『太平天国資料』(近代史資料増刊) 中国科学院歴史研究所第三所 近代史資料編輯組 科学出版社 一九五九年
- 六 『陳玉成』上海人民出版社 《陳玉成》編寫組著 一九七二年
- 七 『太平天国野史』凌善清編 上海文明書局 民国十三年
- 八 『太平天国鉄関』進歩書局 台北、文海出版社 民国六二年

(十六頁下段へ続く)